

『今夜もふたり言』

せきね かつや

清掃のおじさんとおばさんたちが帰られると、もう深夜の零時を過ぎようとしていました。

一日の仕事が無事に終わって、車庫で眠りについた電車の窓から差し込んできた秋の淡いお月さまの光が、思いやりゾーンの薄緑色のシートを照らしはじめていました。

「今日の狸は二匹だったよ」

「ボクの方はおかげさまでゼロだった」

今夜も何時の晩と同じです…二人の会話は、狸たちの話題から始まるのでした。

「ひとりには男の大学生だったよ」シルバーくんは、口をどがらせて話をつづけます。

「お婆さんが乗って来られると、今まで読んでいた漫画雑誌を閉じて、急に狸寝入りを始めるんだよ。」

(1)

「もうひとりには、女子高校生だったよ。赤ちゃんを抱っこしたママさんが目の前に立っておられるのに、スマートフォンから目を上げようともしないんだよ！もうあきれ果てってしまったよ…怒鳴りつけてやりたかったよ」

「淋しいことだね」

「本当に悲しいことだね！」

「先が思いやられるよ」

ふたりは、深くため息を付いてしまうのですが――

「でもボクの方は、嬉しいことが二つもあったんだよ」

優先くんは、急に明るい声で話し始めました。

「真新しいランドセルに黄色い防犯ベルを吊るしていたから、きつと一年生だったと思うんだけど、感心な男の子たちだったよ」

優先くんは、よほど嬉しいかったのでしよう…もう声が弾んでいます。

(2)

「たしか三人連れの小学生たちだったよね？」

「そうだよ…四人掛けシートにひとりだけで座っておられたお婆さんに——（ぼくたちもお座りなさいよ!）と声を掛けられると——（シルバーシートはお年寄りの思いやりの席なんだ!）お婆さんに明るい声でハキハキとお答えして、ひとりとして座ろうとしなかったんだよ」

「お婆さんの声も小学生たちの元気な声も、ボクの方にもはつきり聞こえて来ましたよ!」

ぷりぷりだったシルバーくんも、もう狸のことなど、すっかり忘れてしまったようです。

シルバーシートの窓ガラスに書かれた——この席を必要としている方がおられます——のメッセージを改めて噛みしめながら幾度も幾度ももうなずいていました。

(3)

「あとはね、仲良し二人組みの女子中学生だったけど…と、優先くんの明るい声がつづきます——」

「坊やを乗せた乳母車に乗ってくると、さーつとママさんが座れるドアに一番近いスペースを空けてあげたんだよ。嬉しくなつてしま…お母さんと一緒にありがとう!と、最敬礼だったですよ」

——優先くんの明るい声が弾みつづけています。

「彼女たちがね…笑みをこぼしながら坊やに優しく話しかけるので、坊やも、両手をパチパチ、両足をバタバタさせてもう一心にお姉さんたちに笑顔で応えようとするんだよ…ゼロ歳児だったけど、お姉さんたちの優しさがわかるんだね。ボクも気分が爽快になりましたよ」

嬉しい気分のおすそ分けに預かったシルバーくんが、ふと思いだしたように夕方の出来事を話し始めました——

(4)

「五人連れの女子高生だったんだけど面白い話をしていたよ
 —それはねシルバーシートを必要とする人の優先順位の話題
 だったんだけどね…窓ガラスに描かれているでしょ…ボク
 たちの電車では、1番がお年寄りで、次がお腹が大きい妊婦
 さん、3番目が身体の不自由な人、一番最後が赤ちゃん連れ
 の人になっいるでしょ」

「その通りだよ…ボクの上の窓ガラスの絵は、杖を持ったお
 祖父さんから始まっているよ」

「それが電車によって違うんだって」

「ホントですかね…それは初耳だよ」

「地下鉄ではね…1番と2番は同じだそうだけど、3番が
 乳幼児連れの人で、4番目が身体の不自由な人と…逆になっ
 ってるだそうだよ」

「いろいろの思いがあって面白いよね…」

(5)

「彼女たちの話によるとね〜JRは最初が乳幼児だそうだ
 よ。つづいて妊婦さん、お年寄り、お終いが身体の不自由な
 人の順になってるんだって」

「そうそう〜ボクにも感心した話があったんだよ」と、シル
 バーくんが、話の話題を変えました——

「始発駅から乗って来られたお婆さんなんだけど、座ると、
 早速バックから小さな本と鉛筆を出されて始められたんだ
 よ。《ノンブル》ですよ。レベルは星印が三つだったかな」

「《数独》ともいう数字の推理ゲームのことですよ…お年寄り
 の頭の体操に良いと思うよ…おすすめのゲームだよね」

「終点近くまで40分ほど乗っておられたけど、休まずに
 真剣にチャレンジされていましたよ。乗り過ぎされはしない
 かと心配したほどですよ」

(6)

淡いお月さまの光が、おしゃべり疲れた優先くとシルバ

ーくんの思いやりゾーンの上に降り注がれています——

「もう眠くなって来たよ」

「そろそろ寝ることにしようよ…」

夜が深まり静まり返った車内に、やがておしゃべり疲れた

ふたりの寝息が流れ始めました……。

明日は《敬老の日》なのです。穏やかな秋晴れの一日になることでしょう。今夜のお月さまが約束されています。

一匹も狸が座らない。きっと優しい思いやりの人たちとの

ふれ合いの楽しい一日を夢見ているのでしよう…。

「優先席付近では携帯電話の電源をお切り下さい」「優先席は

思いやりのシートです。必要とされる方にお譲り下さい」

明日もまた車掌さんのアナウンスが流れることでしょう。

(おわり)